よ みち たつと ところ もの しよ しょ ごと す たつと ところ
世の、道に貴ぶ所の者は、書なり。書は語に過ぎず。語の貴ぶ所
もの い いたが ところ もの げん もつ つた
の者は、意なり。意の随う所の者は、言を以て伝うべからざるな
しか よ げん たつと よ しょ つた なおたつと
り。而るに世は、言を貴ぶに因りて書を伝う。猶貴ぶに足らざる
なり。故れ視て見るべき者は、形と色となり。聴きて聞くべき者
な こえ かな せじん けいしよくめいせい もつ か じよう
は、名と声となり。悲しきかな、世人は形色名声を以て、彼の情
う た な か けいしよくめいせい は か じよう う た
を得るに足ると為す。夫の形色名声、果たして彼の情を得るに足
すなわ し もの い もの し しか よ あ
らざれば、則ち知る者は言わず、言う者は知らず。而るに世豈に
これを識らんや。

【大体の意味内容】

この世において、求道のために尊重するものは、書物である。ただし、書物は書き記され
たことばに過ぎない。ことばが尊重するものは、意味内容である。そうした意味内容のも
とになる情念は、ことばでは伝えられない。ところが世間では、ことばを尊重するものだ
から、書物を後生大事に伝えていつている。しかしやはり、書物それ自体はべつに尊重す
べきものではないのである。目で視て見えるものは、物の形や色であり、耳で聴いて聞こ
えるのは、物の名や音声である。悲しむべきことに、世の中の人々は、そうした形や色、
名や音声によって、それらの根本にある情念を十分把握できるなどと思ひ込んでいる。あ
の形や色、名や音声といった、表面的な現象だけでは、そうしたものを表象させる根本
の情念を知ることばでできない。『老子』にあるように、「真実に知っている者はことばで説明
しないし、ことばで説明し切ったと満足する者は、実は真実に知っていない」のだ。世